

ナビ 読書

北海道近現代史 問う良書次々

北海道の近現代史を読み解く優れた歴史書が相次いで出版されている。女性たちによる民主主義の学習、忠魂碑の宗教性の問題、道内各地の碑文と、多様な視点から歴史の複雑さを浮かび上がらせている。リチャード・シドル著「アイヌ歴史(岩波書店)と秘野富士著「治安維持法の現場」(大花出版)を1月30日の本欄で紹介したのに続き、おすすめの本を取り上げる。(中村康利)

戦争加害 自覚する女性

山村淑子・旭川歴史を学ぶ母の会編「沈黙の罪が開かれたとき」(アイヌ出版、3300円)は、1978年から2014年まで続けられた旭川の女性たちによる自主的な歴史学習会「旭川歴史を学ぶ母の会」の活動とその意義をつづっている。

編者の山村はもともと東京の高校で歴史を教えていて、夫の転勤に伴い旭川に転居した。そこで出会った「昭和一代」の女性たちと歴史を学び合う「母の会」を始めた。

本書には、同会の当時の会報に載った参加者たちの文章が収められている。特に重要なのが、学習を畫ねるうちに、自分たちが学徒動員などで「絆糸にお国のために働いたこと」「戦争遂行を支えていたこと」だったと気づき、女性たちが「本当にショックを受けてしまいました」と打ち明けるくだりだ。

女性たちは「中国や朝鮮に侵

略することから始まった戦争で、国の「上層部の指導者や、直接戦場で手を下した者」だけ

護国神社の成立を検証

今井昭彦著「『北鎮郷市』札幌と戦没者慰霊」(御茶の水書房、2860円)は、近代、天皇を現人神とし、戦没者を天皇に準じて「カミ」とする「人神信仰」をきっかけに、札幌護国神社の成立過程を検証した。著者は歴史学や社会学などを研究し、神奈川大などで非常勤講師を務める。

著者の問題意識は、1993年の「豊田忠魂碑・慰霊祭訴訟」の上告審判決で、最高裁が忠魂碑を「戦没者記念碑的な性格のもの」として、宗教性を否定したことに端を発する。判決について北海道新聞の社説も、憲法で国や自治体の宗教的活動を禁じた「政教分離原則の“なしくずし”を助長するのではないかと疑問視した。

同書によると、近代札幌で戦没者を慰霊する起源は、1897年(明治10年)の西園戦争で出兵した市田兵の戦没者たちを祀る「市田兵招魂之碑」にさかのぼる。その後、現在の中島公

でなく、自分たちもまた加害者だったと認識する。

戦前・戦中の教育で植え付けられた皇国史観を脱し、民主主義を内面化していく過程は、日本政治思想史の研究者丸山眞男が敗戦直後、中卒以来信じてきた近代天皇制への「思い入れ」と決別するため、論文「超國家主義の論理と心理」を執筆、発表したエッセイを思い起こさせる迫力がある。

園に、忠魂碑や「札幌招魂社」が建てられ、日露戦争で亡くなった兵士たちを合祀した。これらは現在の札幌護国神社の場所に移され、日中戦争下の39年、札幌招魂社は札幌護国神社と改称された。

本書は、札幌護国神社の歴史的経緯を「招魂碑」から「忠魂碑」を経て「招魂社」に至り、「護国神社」に発展していく、靖國祭祀・神式祭祀の過程だとして、忠魂碑は「戦没者を祀る宗教施設である」ということが、改めて明白になったのではなからうかと結論づけている。

◇

このほか杉山四郎著「増補改訂版 続アイヌシリ・北海道の民族史」(中西出版、1650円)は、道内各地のアイヌ民族に関わる碑、19世紀末に過酷な道路建設などに従事させられた囚人、戦時下に強制動員させられた朝鮮人や中国人を慰霊する碑などを訪ねて記録している。

